

部 報

演說部々報

四月例会

四月二十二日午後七時より本學期第一例會を瑞邦館に開く。

三春の行樂未だ棄て難きにや、夕食後杖を曳いて散策に出かくるもの多く氣力ある演說も寂莫の裡に葬られ去らんなご思ひ居りに、定刻に至れば聽衆堂にみつ。我に熱誠なる辯士あり輝く眼を演壇のあなたに馳せて將に舌端に風雲を卷かんとす、開會前數刻に於ける會場の光景は一種蕭條の氣にみちたり。宮本委員は開會を宣して龍南の演壇に對する眞摯なる希望と覺悟とを述べて拍手の裡に降壇すれば七名の辯士代る／＼起ち一々縦横の論議をなす。終つて

茶菓あり歡語談笑の裡に閉會したるは十一時頃なりき。若し夫れ龍南の思潮に注意を拂ひ校風の將來に思慮を用うるの人は必ずや彼等の言に聞かざるべからざるなり、吾は本學期最初にこの盛會を致したるは深く諸君の熱心に感謝し特に松浦校長由比教頭の態々御臨席下されしは吾々の最も光榮に感じ毎度ながらの御厚情は深く鳴謝する處也。遠山部長は御病氣のため御來會の榮をたまはざりしは甚だ遺憾なりき。次に出演希望者甚だ多く委員その撰擇に苦しみ爲めに抽籤の止むを得ざるにいたる、あゝ龍南の演壇こゝに益々生氣あらん。尙當日の登壇辯士は左の如し。

- | | | |
|--------------|-------|--------|
| 一、開會の辭 | 一、一、甲 | 江橋 修君 |
| 一、吾は戰鬪者也 | 一、一、甲 | 山村喜久茂君 |
| 一、我國民と海軍思想 | 一、一、丙 | 上内 彦策君 |
| 一、世界統一觀 | 一、二、乙 | 土居 莞爾君 |
| 一、日東男兒の氣象を論ず | 一、二、甲 | 横手 貞武君 |
| 一、強者の不平 | 三、二 | 合屋友五郎君 |
| 一、餘裕あれ | 一、二、甲 | 石田 和吉君 |
| 一、恐るべき流行病 | | |

卒業生豫餞大演説會

五月二十一日夜、例年の如く卒業生豫餞演説會を縣會議事堂に開く。

新緑漸く濃かならんとする垂柳を、落日斜に射て、悠々たる白河の水暮煙に圍繞せらるゝ頃より堂邊に集るもの簇々、午后七時、石田委員立ちて豫餞の辭を兼ねて開會の辭を述べ、次で龍南三年の意義ある勉勵を以て、將に銀杏城下を去らんとする諸君の演説に入る。

第一席

靈と肉

二部三年

村井光次郎君

聽衆が俟ちたる辯士は登りぬ、紅白の幕を以て飾られたる壇の上下青くアセチレン燈に輝きて、拍手は萬雷の如堂を壓して再元の靜にかへれば先叫ひて「人間はいかなるものであるか」との語を冒頭に置き萬物の靈と謳はれ有情の冠首と稱せられて居る人世の真相は一朝一夕でわかるものでない、唯物派は人生の本体を肉体に、唯心派は之を心靈に歸せんとして居る、何れも一面のみ見たる偏見たるに過ぎない。

と論じ靈と肉との關係につき、ハツキスレト、プラ

ト、ゼームス、スペンサー、等の説を引証して其見地を異にせるを解き、

吾人は大膽に其優劣を定めんとするものではないが、兎に角精神作用は腦細胞と密接な關係ある事は是認せらるゝ、誠に造化は吾人に一片の物質を與へて呉れた、之を Protoplasm といふ、之が肉体の始源である、精神作用の根源たる腦細胞も之に淵源するのである、と説きて精神と肉体との離るべからざるを肯定し、前述の唯物派を駁し肉体は精神の附屬物と見る事を得とて、ソクラテス、の悲愴なる最後、孔子の陳蔡の野に苦しみしを述べて其思想數千年後の今日吾人を支配せるをとき、論調一步を進めて然らば人は靈、肉、何れのために生くべきかと叫び、

もし人間性慾のために生くるものならば濁浪高く辛酸多き塵の世に罪に汚れ呪詛に惱んだ人生の悲痛に苦まんよりは飽まで食ひ、飽まで眠る豚の生の平和なるを欲する、幸にして金殿瑤臺の花月にあることありても人世幾許ぞ、もしかゝる生活を欲する人あらば未だ天の意を解せぬものである、態々他の生物と伍せんとするのである、

と論及して人間が他の生物と異なる所以を明にし。

「汝は如何ともなし能ふ、故に汝はしがなまざる可らず」と云つた、ガントの無上命法は人が理性の默示に従うて活動すべき事を説破し

たのである。キリスト野に饑ゑて「吾は肉の子にあらず。靈の子なれば肉を輕じ、靈を重んず」と言ひ、孔子は「天徳を吾になせり」と教へ、釋迦は「唯我獨尊」と絶叫した。こゝに於て人間五尺の小軀も Microcosmos である。原頭に立ち伏仰天地の高漠を覺り、心を清めて理性の黙止に聞けば、形骸、名利に動くものゝ如何に憫むべきかを知り得る。要するに心靈の完全なる調和發達によりて理性の命に従ひ至善至美に近くのが人世の意義である。

かくて論鋒一變、現代文明の物質的なるを罵り、烈強の實利主義を冷嘲し、カルタゴの榮華の夢あと、ギリシア文明の精神とを比較して目下靈界救済の責はかゝりて吾人が隻肩にありと結ぶ。流暢なる君が論、説き來り説き去つて神に入る破るるばかりの喝采の中に降壇。

第二席

天下の士を以て任せよ 一部三年甲 福田慶歳君

先づ謙讓して此論を爲す資格あるやを疑ひ、敢て此論をなす所以は太平の情眼を貧れる者を戒め國破れて山河在りの感無からしめんとす、國家の危機は絶えず吾人の前に轉廻せり、此時に當り天下を提げて立つの士の如何に必要なかとて、弘安の時宗

伊太利のカブール、ガルバルデーを引例し、更に、

而も事の破るるや、其破るるの日に、破るるに非ずして、必ず仍て以て來るところあり、ローマの滅ぶるや、その盛時に因り、スベイン、オランダの衰ふるや己に殷富の時に萌して居つたのではないか、蘇峯曰へる如く、天下の憂は國民無頓着より甚だしきはないと、剛勳なるケトージが、ローマ人の腐敗を罵り、テモステチスガアチ市民の無能を叫びし際は未だ此等の國民市民は廢頽地を拂ふに至つて居なかつた、吾等が天下の士を叫ぶこゝにあるのである。

一言一語懦夫をして立たしむるの概あり、茲に於て論法一轉現今我國の狀勢を省みて、一等國、戰勝國、四海無事の連呼に安眠すべき時なるか、遼土還附的第二、第三の屈耻は起らざるかと叫び。

日露戰爭の結果は太平洋問題につき新しきエポックを作りたりといふが、其競爭國は何國ならんか、パナマ運河は一九一三年に開通す。茲に於て、或人は説をなして此運河開通前後即明治四十七八年頃には何れの國とかが干戈を交るに至らん、私は其何故たるかを知らないが……………。

とて彼の米國が一八二三年以來のモンロー主義が近頃純然たる國家實利主義に傾きしを論破し、更に翻つて露國が我國より戰敗の結果永久に東洋の不凍港を棄つべきかを難じ之を以て我國の地位を思ひ併

せて國民の元氣、否、青年の元氣の頹廢著しきを見
ば士重信義輕末利。小心翼々仰聖帝。の慨あるもの
幾人かあると悲憤又慷慨し。

あゝ妻臥病床、兒泣飢、的幾多の志士の犠牲によりて此明治の聖代
は出来たり、カープルの苦心ミガルバルデーの熱誠と相俟て伊太利
の今日を見る、彼のロームカアテス又はシシリカアテスの聲聞く時、
諸君は如何の感想が湧くか、南州誠めて曰く「命もいらす、名も、官位
も、金もいらぬ人は始末に困る人也、此始末に困る人ならでは艱難を
共にして國家の大業を成し難し」とあく、いぐる人こそ天下の士と云
ふものである、私は最後に彼のマシニーのマキシムたる “to live
to think, to hope for Italy” なる語を叫び諸君と共に服體
せん事を欲するものであります。

第三席

時代思想及其批判

一部三年甲

中村寛猛君

劈頭近代思潮の先驅者は彼の「自然に還れ」と叫び
し佛國のジャン、ジャック、ルーンナーなりと喝破し、
次に當時の佛國國情を述ベルンナーをして此の反文
明の思想を唱導せしめし所以を論及し、更に歐洲十
九世紀の後半に於ける、思潮界の混亂混沌の状況を
縷述し、遂に世紀末的傾向頹廢的思想を産みし所以

を明らかにし、論歩一轉

總べてこの煩悶も苦痛も懷疑の二字に初まる、疑へば際限ない、吾人
人間の淺薄なる智識を以てして窺知し得る事實は唯吾人の生存と
吾人の死てふ二大事實而已である、此れより一步踏み込んだ問題
「……………何故活きる」と云ふ問題には遂に的確なる解答をなし
得た者がない。

と説き「人生字を識る憂の初なり」と論じ、此の懷疑
の思想はやがて近代思潮の根本に横はる一大潮流な
り、此の懷疑を外にしては、近代思潮も現代思想も
遂に無意義なるべしと斷じ、夫れより近代思潮の梗
概を述べ、却説曰く

されば「此れを如何にすべき」と云ふ事が目下の緊急問題である。
余輩は「誠に止むを得ない」との數語を以つて答ふる事を得る、蓋
し原因ありて初めて當然の結果が生ずる。今日の思想を産むに付
いては正に生るべき原因がある、種あつて今日の花は咲いたので
ある、其花を見て色を青くするものは其の種の存在を忘れて居る
と論じて十九世紀に於ける科學の發達、社會の狀態
が遂に今日の時代思潮を誘起せり、故に此のクライ
マックスを越ゆれば、平々坦々たる吾人の行くべき
道あるべし

余は今日の時代傾向を目して憂る喜ぶべき一現象なりと思ふ、何

なれば此れ文運進歩の一階段なり。雨降つて地固る。暴風雨の後
に燦爛たる太陽の光明を拜する事を得る。今日の時代傾向の行き
詰る所、其所に新らしき文明新らしき社會の出現を望み得る「古
き物瘉れて新らし花其の終牆より咲かむ」と。

然るに茲に道學先生、保守主義者なる一團あり、各々
其の見る所を以つてして、今日の時代傾向を目し
て危険なり、不健全なりと云ふと雖も活ける人生の
疑惑に逢着せるなき彼等に多く關するの要なしと論
じ、翻つて、

何等の權威を認むを得ず、何等の福音に接するを得ず雖然然た
るは實に今日の有様である、ナザレの聖者は曰く「求めよ然らば與
へられん」とパンを求めむとして石を得たる吾人青年は福である、
ニーチェ曰く「汝の立てる處を深掘れば必ず真理の泉湧き出でむ」
と。吾人の立てる所を知るに由ない現代青年は禍である。迷へる人
の子は埃及を出でて幾日、吾人の至るべきカメンは尙々前途遼遠
である。

然らば此の激浪を横ざり、此の難關を脱せんことせば
如何にすべき此の時代と精神の指導に任せむとせば
如何にすべき、各自先づ自覺する所なかるべからず、
言はむと慾する前に先づ覺る所なかるべからずと説
き、

懷疑と努力と自覺と、之れ遂に吾人が至るべき道である。自覺は先
づ吾人が堂に登るの關門である、而して覺らむとすれば先づ疑は
ればならぬ、然しながら、疑と否定とが人生の全般ではない、努力
以つて自覺の域に達するを期せればならぬ。

と結んで降壇、流暢なる快辯蓋し近頃稀に聞く一大
演説。

第四席

文明の暗流を論じて憂國の

志士の奮起を望む、一部三年乙 片谷惣四郎君

私の題は頗る長いので前辯士、福田君、中村君兩人の演題を一緒に
したようなものでありまして、私は滔々たる中村君の雄辯に殆ど我
か説、我が主義を忘れんとしたのでありますが、私は全然中村君の説
に賛成する事の出来ないものであります。

この前置きをなし文明の裏面より觀察せんとして先
づ數十年前迄は夢にだも想像せざりし現今の物質的
文明の驚く可き發達を論じ來り、一般人民は文明を
有難いものとして居るも、自分は文明が果して人類
の幸福であるかを疑ふとて、暗流に横るものを數ヶ
條に分ちて具体的に懇説し、平和の戦が更に血と鐵
との戦以上の慘景を演じ、文明が人類に不平均を齎

すを痛説し丘博士の人類絶滅説を引き來りて其末段に、

「文明の進歩は吾人に生活難の問題を横ゆる、人はために神經過敏となる、仍て、煩悶と不平とが起る(従つて中村君の云へる如き)懷疑になる、宗教に就ても道德に就ても懷疑者の意識は亂暴となりて社會に反抗する様になつて、さも斃れをする様になる、」といはれて居る、中島博士は之を進化論者の一空想であるを駁して居るが、何れにしても、半面の理はある、更に恐しきものは、思想界に於けるものである、拜金宗、個人主義、社會主義の如き不健全の思想は瀾漫する、空想家、テカタン徒は多くなる、遂に戊申詔勅は喚發せらるゝ、文部大臣は人格教育を説く、一方には社會問題重疊し來る要するに現今は精神、物質兩界混亂危機の時代である。

と絶叫して、今後議會の前途を苦るものは社會問題ならんと説き來り。

近日歸朝の内務の床次局長は「歐洲の精神界を統一するものは依然として、キリスト教である」といつてるが、吾國に於ては何であるか、キリスト教か、佛教か果た儒教か、否々我輩は純日本主義と叫ぶものである、「道鏡何者ぞ」と叫し清麿の精神「正成生きたらん人間は聖運再び開かるべし」と言上せし楠公の精神を諸君に要求するのである、併し乍ら諸君私は現今を徒らに悲觀のみするものではない、怒濤山なす間洗み行く艇内に悲愴なる死の前に座して神色自若なば國家、君主、更に部下遺族の事までも思ひし佐久間大尉の最後あり此精神

は、吾が國民の精神として何人にも未だある事は疑はない、あゝ諸君感情一度動く時は冲天の力あるは吾人青年である、十八世紀の英國の顛勢挽回を謀せるは渺たる牛津大學生ではないか、米國獨立戦争の當時自由を絶叫したのは十七才のハミルトンではないか、西郷先生の始末に於へぬ人といはれた人の如き憂國の志士の奮起を望むのである。

第五席

如斯信

三部三年

桐山實隆君

拍手に迎はられし君は莊重なる態度を以て聽衆を見廻し、牧師の如き口調を以て、悠々として迫らず徐ろに口を開いて曰く。

「凡そ世の中にありては信なるものは、行爲の基礎となるものなり」との前提に初まり。

抑も人生とは何ぞや、此疑問スフィンクスが英雄エジプスに掲げし以來宇宙の謎として殘されて居る、「世の中は何にたごへん朝ぼらけ漕ぎ行く船の跡の白波」と人生果して白波なるか又は天國に至るの一階段、神人合一の曙光の漸く見始めの場所と見るべきか。

どの疑問あるにか、はらず人生は一箇の森嚴なるものとして吾人の身邊に肉迫し。自覺せると拱手せるを問はず人生の波濤は常に吾人に打寄せ來る覺ゆと語氣を強め、

人生に於ける信は凡ての人相互の關係に於ける楔又人生諸機關運轉の緩精油さも見るべきか。もし此世の中に信なるもの全く地を拂ふに至らんか、實に其結果や知るべきのみ、

と論及して具體的に個條的に實例をあげて、商業、經濟、法律、道德、家庭、社會、國家及び學問の方面に及んで。

吾人は物理学に於けるヒポセシス、ゼオロリスを信する事無くして此等の智識は捕へ難く、此宇宙の統一を支配する法則の存在を信ぜずしては眞の科學は成立せざる也、一元論に於けるヘツケル、萬有引力説に於けるニウトン、進化論のダウイン、皆吾人、信なくんば一步も進む事は出来ないのである。プラトール、アリストートル、スピノザ、カントの如き哲人も信の力無くしては眼に見ぬ宇宙の奥にある大實在は認め得ないのである。

實例の終りに當り更に宗教の方面に論鋒を轉じ、理性と信、及び知と信との關係につき梁川の語を籍り來りて信の論據を確め、之が必要なると共に迷信を排斥するものなりとて、

ジョージ、エリオットのシラス、マーナー、に於ける信仰と愛とより離れたる機械家マーナーが一個の蒼苔塊、理想的守銭奴として描き出されたるは面白き事ならずや、又ゲーテのファウストに於て學問に飽きたる、博士ファウストがメフェイストフェレンスの魔力により、若返りて貴公子として活動する時、信無きファウストが如何に獸的

行爲を敢てしたるかを述る所興味ある觀察なるべし。

「信仰を持って」といふ言、必ずしも弱者の叫にあらざるなり、とてルツテルがスカラ、サンタの大悟の聲「義人は信仰によりて救はる」との話を引證し、更に一段聲を嚴にして論を結んで曰く、

昔キリスト故郷カペナウンにて教をなせる時、ローマ兵白人の長、彼に來りてその僕の醫されん事を乞ひ曰ひけりば「汝ただ一言を出したまへ、さらば我が僕は癒はん」と、キリスト、集團の弟子に曰ひけるは、「已れイスラエルの内にも未だかゝる厚き信に遇はざる也」と、私は斯の如き信を諸君にすゝめて龍南の地を去らんとするものである。

と結論して壇を降る、記者は認めぬ、辨士が熱誠凝りて玲瓏、閃々たる玉露の眼中に漂へるを、あゝ如斯熱誠ありて如斯信は叫ばれぬ。

第六席

禪と內的工夫

一部三年丙

魚住正雄君

我部の驍將は登壇しぬ、君何をか言はむとす三四場の去る影あるを見て、開口一番福音を聞かんとする者は暫く耳を傾けよと怒號し。

人は先天的に死を恐るゝものである古來英雄豪傑が生死の問題に少からず煩悶をやつたのは事實である、英のウクトリア女王は其死

せんとするや「我命を救ふ者あらば四億圓を與ふべし」と云つた誠に死は嫌なものにして、生は惜しいものに違いない。

と説き起して死生の間從容として躊躇せざるため修養には禪の必要なるを説明し、之が歴史的發展を述べ宋時代に彼の禪林の大智識が深酷なる接物應機を行ひ斷肢・投穴の悲愴なる手段を以てせし盛時より、ひいて吾國鎌倉時代より以後名將武士皆之を修めたるを一々例證し、以て禪は治國平天下の大道に大なる關係ありと論じ

禪は大悟徹底の域に達して本來の「我」の面目を發揮するを以て、目的とするものである。元來人間は靈明犯す可らざる佛性を具有するものであるが之が迷妄のために閉ざると時人は淺ましき凡夫となり果つるのである。恰も叢雲が明月を蔽ふ時に明月はないのではなく、暗雲のため其光を現さない様なものである。是等迷妄熱心の暗雲を拂つて、本地の風光に接し真如の月を眺めんとするのか禪の骨子である。が徒らに三千里外に真如の月を求めんとするのではない。本來具有の「我」其物の面目を發揮すれば足る。凡情を去つて聖解なく、人心を去つて佛心なし、人心悟徹すれば即佛心、佛心滅却すれば即人心である。されば捨つべく厭ふべき罪惡の世と思つてゐた娑婆も一度豁然として大悟すれば乾坤一變煩惱即菩提、娑婆即淨土の一大歡喜に浴する事が出来るのである。

と論及、熱血湧き昂然として獨尊の意氣あふる、次で其修法を教へて曰く。

然し禪は只理窟の學問ではない、飽達實行努力せなければならぬ。其手段としては大智識に參して公案を解くも可也、然し之は餘程困難の事で雙手の聲に七八年を費して分らない人多しといふ、吾人は故に、生理的に徹底の域に至らんとする耳根圓通法を養成するのである、聞く此法は釋尊が廿五菩薩に説きたる骨髓である、我國にて近世禪界の奇傑原且山師は此法を以て衆生を導かれた、右耳根に定力を用ゐる腰骨盤より上流し來る陀那の腦に注入するを防ぐのが此法である、定力とは内部に向つて加ふる精神作用で陀那とは腦に入りては無明となり、胸に入りては煩腦となる大毒流である（通俗禪語原田玄龍師耳根圓通參照）、此陀那を驅逐すれば本地の風光に觸るを得るのである、吾人は此法をたゞざる者である。

今や世人はテカダンの文明に耽溺して内界に於ける不老不死の靈藥を求めんとはしない、諸君は宜敷、一日も早く禪林に走り生死の大事に處して動く事なき人たらん事を望むや甚だ切、一衆生、語越にも福音に憧憬してかくは釋尊の提灯持を爲す所以である。

と論を結びて降壇。喝采、拍手。時に十時四十分。筆を棄て、堂を出れば涼風面を吹く仰げば皎々たる月中天にかゝり、伏せば潺々たる逝水瑟を鼓して、夜寂々。（責記者にあり、礎）

醫專談論部大會

七十五

五月二十二日午後二時縣會議事堂に於て開かる。同校の招待に應じて我部は送るに左の一雄將を以てせり。

日露戰役後の列強關係 一、二、甲 宮本義介君

君は好個の演題を提げて他校の演說會に臨む。五十分間の長演說に聽衆をして靜に傾聽せしめたるは當日第一の成功にして甚だ賀すべし。茲に君が勞を謝す。

五月例會

五月三十一日午後三時瑞邦館にて開く。石田委員開會を宣して、二人の辯士は流暢の辯を以て氣焔萬丈。

一、松柏的人物

一、二、丙 元山滋樹君

一、東洋と日本

一、二、甲 山本俊磨君

一、清國雜誌

來賓法學士 中島爲喜君

本校出身東京朝日新聞記者中島氏は歸熊中の繁忙なる寸暇をさいて我部のために來駕せられ豊富なる材料を以て清國現狀につき一時二十分間滔々として述べたまふ。聽衆館にみち一同稽首靜聽す。

キング博士講演

六月四日午後二時縣會議事堂にて、高工醫專五高の演說部主催により米國オベリン大學總長キング博士は熊本學生の爲め面白き有益なる一場の演說を爲たまふ。

生活の美術

米國オベリン大學總長

キング博士

通譯

神戸高商

小川 教授

滔々長きに亘る雄辯而も些の疲勞の色なし満堂立錫の餘地もなく近來稀なる多數の聽衆は満足感謝の拍手を以て博士を送る。

六月例會

六月三日午後七時より本學期最終例會を瑞邦館に開く。宮本委員が開會の辭に次で五名の辯士は日頃蓄へたる各自の感想を遺憾なく演じて活氣堂に溢る。

一、開會之辭

一、自然の力

三、一

矢野川四郎君

一、所感

一、一、甲

國吉 眞現君

一、偶感

一、一、丙

緒方 弘君

一、興國の使命と青年の覺悟

一、二、甲

中西彌三郎君

一、傳說的「唯我獨尊」の意義 一、二、甲 横手貞武君

一、犠牲の感念と我國民性 一、二、丙 吉田佳藏君
 我演壇は一回と隆運に趣く。斯道に志す人七句の
 夏休みに絶大なる思想と勇氣とを蓄積し以て來秋奮
 つて登壇せられんことを切望す。

庭球部々報

庭球戦記

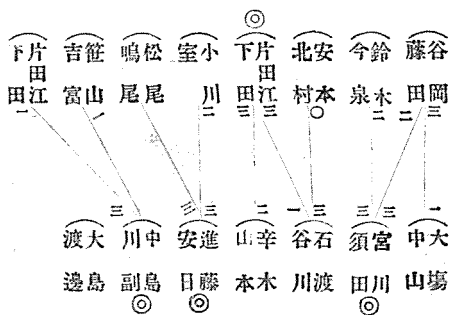
一、對、長崎醫學専門學校。

ラケットに觸る。ボールの響長閑に、コート、の面、
 草の芽生じ、春らしい春の印象が心に刻まる。落
 花地に羨し、白水空しく流る流るればとて、蘇峯の
 被衣縁にして、縷々たる煙天に朝すればとて、殺風
 景の吾等狂球家の胸に、血だの、情だの、そんな床
 しなもの、湧いたり、揺れたりしそうにもない。
 彼方錦江灣頭、うら若き新年の日に照らされ激戦遂
 に得た勝利は、日がな、夜がな、心に宿り、南風の
 まに、相談つては微笑を禁じ得なかつた吾等も、
 日數たつまゝに、衰へたではないか夢に七高を見な
 いとは。

俄然!!! あゝ肉は躍り骨は鳴る。見すや、長崎醫專の
 雄々しきチームは熊肥を襲う、醫專を薙ぎ、高工を
 倒し吾等が前に現はれたのを。

天氣は薄曇る——我等が理想——四月廿四日二時、
 安藤氏審判の下に一大快戦は始まつた。

長崎軍 五高軍



兩軍、組の配置は大体に於て、期せずも似て居るや
 うだ。敵味方、力の差異がよしんば有るにしても面
 白いゲームが始まるだろうと豫想される。

谷岡、藤田——大塲、中山

敵の先鋒谷岡藤田共に氣鋭の士。終始一貫果斷を以て戦ふ所先鋒として稀有の適任と思ふ。味方の大塲は五高選手としてこそ新顔なれ、中學時代隨分鳴らせし男。巧者の二字を以て君のテニスを表白し得よう。前衛中山、顔の如くテニスも古い。ハキ／＼したそして覽者をアツと云はせるところはなくとも、黑人向きの腕を有してゐる。磨き上げた洋館の裝飾品でなくて、確に隠居に撫でられる骨董品だ。

初め大塲敵の前衛の乗するところとなり、中山亦活動の余地なくゲーム二回を獲られ、三回目中山大に振ひ大塲のサーブ成功して茲にゲーム二—一。四回目味方はリ、シ、ブの不利に立ち中山大に勉めしも遂に敗れる。記者は大塲が當日あまりに責任を重視せしを惜しむと共に、日を追うて上熟せる君が腕を益々磨かれん事を望んで止まぬ。

谷岡、藤田——宮川、須田

大丈夫と思はれた大塲組の倒れしに少からず落膽したが、微笑せる宮川に頼しき氣がする。大塲組より弱いが宮川の球の大きいのは將に珍とすべきである。

初め宮川振はず。須田ミス續出してゲーム二回を與へしが、三回目宮川當り出すと共に藤田アセリ氣味にてミス、連發野次の音高くなり、宮川の奮闘は續けられ、須田もいくらか當り出し、遂に大敵を倒した。

鈴木、今泉——宮川、須田

敵の先鋒は意外の組を倒したが、意外の組に敗られた。續いて出て來る敵の前衛今泉年齢廿。見る目眩ゆき少年。浴陽の街に美を誇りし面影も惚ばる。

「色負けするな」の聲は彼所此所に起つた。宮川の球は今泉の取れるものではない。勝敗の數瞭然たりだ。然れども宮川亦心あるの士か。ゲーム二回を今泉に與へ徐ろに首を搔いて優退す。實にこれ一ノ谷熊谷が悲劇。

宮川此の日の奮戦は目覺ましいものだ。モ、シ、ンに注意するやうになつたら、君の前途は活目に値する。須田振はずと雖ども未だ若し、平素派手な遣り口を少しく心したならば次第に確實になる事は疑ひない。

安本、北村——石渡、谷川

安本組は練習振りより察すれば不安定な組だ。石渡

組は安定な方である。然し不安定な組は當り出したら大變。面白い勝負があるかも知れん。五高の策士石渡は例に依つて配球自在。敵の後衛安本は谷川の後輩だそうなる。谷川は呑んでかゝつて居る。従つてその活動目覺し。結局安定は不安定を敗ると云ふ定義に到達した。

片田江、下田——石渡、谷川

片田江組は敵の中堅。三將なりと雖どもその實力或はそれ以上ならむと噂さる。殊に下田は廣島地方に並びなき前衛としてその名を壇にした男。

初め谷川振はず第一回ゲームは敵に占めらる。二回目、石渡大に下田を襲ひ谷川のスマツシングにてゲームワンオールとなる。敵は當らず、石渡谷川共に振ひ第三回目のゲーム味方のものたらむとせしむ。石渡油断して遂に下田に乗せらる。四回目ヒヨロ々々と飛び來れるアウトボールを空中に受け留めし石渡の腕、「肯則」なる毒に爛れ、ヤク氣味に敗れしは惜しい事である。

片田江、下田——辛木、山本

駒にこそ跨げざれ、鎧こそ着けざれ、肩に風拂はれ

草自ら靡く。勇士の出陣堂々たるものではないか。靜に立てる辛木、山本が眉間、幽に動いて幽に消ゆる肉の微動からその決心と勇氣とは曠々と讀まる。初め片田江奮闘し味方は山本ミスを出し、二回目は片田江のサーブ成功ゲーム二を與ふ。三回目辛木笑を湛へて打つ球に餘裕練々、山本のスマツシング水もたまらず。四回目亦辛木の打球は下田の頭上を越ね、片田江をして東奔西走、汗流れて泉をなすも、辛木の微笑に抗する事は出來ずゲーム二オールとなる。五回目片田江奮闘目覺ましく、辛木のロツピング線外に逸し天か命か敵をして優退させた。味方は元より敵も、辛木組の敗れたのには意外の感に杲然たるを得ない。敵は動搖めき味方は黙する。山本は草を摘んでは棄て、棄てゝは摘み、腫を潤まし。辛木は猛々しい兩眼から惜し氣もなく涙を流し、啞然たる川副の傍ににじり寄つて「仇を撃つて呉れ、何卒……」。叩頭いてゐる川副の眼も曇つた。

小川、室——進藤、安日

小川短軀なりと雖ども、恐るべきサーブを有す。進藤、安日共に若き所ありと雖ども戰鬥力の強きこと

中島勉めて幾度かジュースにかへつたが、苦戦悪闘、遂に敵にゲームを興ふ。二回目三回目共に中島の熱球、川副のスマツシグにて容易に勝つ。四回目、死を決して打つ片田江大に當り、前衛下田亦大膽に動いて中島を惱ましたが段異である。毫も意に介せず微突を含んで待遇つて居る、川副活動し出しボレー、ストップボレーを以て遂に勝利の局は結ばれた。

爾來川副はゲーム中少し氣に喰はぬと理由もなく痛癢玉が破裂し短氣を起してゲームを度外視し無茶をする事がよくあつた。その爲め平素の技倆の半分も發揮しなかつたが此度は先づそんな風はあかつた。然し今日は取つた數は多かつたが綺麗なのは二三に過ぎなかつた。勿論「今日は當らない」とはやる前から話し心配して居たから仕様がなない。テニスに限らずヤケクソを起さぬやうに切望する。

敵は意想外に強かつた。味方は思ひ通りの成績は得て居ない。然しそれは自己單位から生ずる慾かも知れぬ。結局見物する人方は味方が意想外に感じた丈けはより多く面白かつた理だ。大島の緩急自在なる球

こ、亞米利加に地震を起さすやうな渡邊のスマツシグ、どを見なかつたのを遺憾とする人もあろうが、そうなつては五高庭球部の顔がない。千潮の様に遠退く見物人の跡を追うて蒼然たる暮色は迫つて來る。暗膽と懸つて居た戦雲は夕暮れの裡に影を隠くし、晚鴉二三点空をかすむる時、再びそよよ平和の氣に、胸襟を開いて、敵、味方温い握手は取り替はされる。

言評禮を失し、選手諸彦の怒を招くものも定めしある事と思ふが、評するには自分を高めて天狗となり、一選手としての自己以外全くの別人となり澄してやらねば出來るやうにもない、その邊諒せられん事を希願奉る

二、福岡出陣記

福岡醫科大學の招きにより、五高より三組出陣す。五月一日、試合當日。朝少し雨が降つたが、彼方松並木の間から聳ゆる法華の行者英雄僧日蓮を仰いで、ラケット取る凡夫の衆生、一念即滅無量罪、彌陀の悲願を今と頼み入れば、空もどうやら收まつて高莊な幾棟の建物のペンキに春の目影は淡く動き出した。ボールの音に散る松の花粉を浴びて立つ勇士の姿、

勿來關を洒落て見たい。大島の... 中學程度その他幾多の仕合過ぎ、來賓對大學選手一組宛の取組は初まる。番移り組更はりて宇都宮、山本は出陣した。

大學 五高

内田 宇都宮

我が宇都宮は、練習はして居ないが昔の相撲、一朝一夕に腕は落ちぬ。

幸木の代理として出陣したのである。

谷口は四高出身の勇士。

宇部宮が何時もながら落付きはらつた武者振り、山本が魁偉な體驅を、右に左に搖する時、之れに向ふ敵が何邊にあらうぞ。谷口、瞑目して弓矢八幡祈ればとて、やつと一ゲームを得た丈の功德。

谷口の汗は山本の破顔となり、宇都宮の微笑は内田の溢面と化し、ゲーム終らむとする最後の一球、谷口力込んで打てば、走り行く山本が應變のボレー、見すや、内田が走りし跡を襲ふてコートの中に、バウンス球は遠く白沙の上を「アンナ」に打たるれば氣持が「わ」と嗚きながら運うがつて居るではないか。

五高最負の諸中學生の喝采の間に退場す。長崎高商選手の仕合終りて中島組は駒を進めて場に入る。

大學 五高
大石 川副

本間は二高に久しく牛じつた水戸出身の後衛。大石のネット、プレートは綺麗なもの。共に冬季休暇中京都にて三帝大學の仕合に、その名を赫々たらしめた組である。加茂の水に磨いては、いやが上に素晴らしい腕となつて居るに異ひない。一奮闘いざやと許り乗り出す中島。心ゆるさじと、帽子撥ね、足袋打ち棄てし身構ゆる川副。

ゲーム始まつて、敵振はず、大石のリシーブ、ネットインありしのみ、川副のスマッシュ、に終る二回目、川副のリシーブを大石見事打ち込むと見れば、火急一髪の間、髓をバックにひねり發止と受くる川副の早業、球は再び大石の右側斜に走り覽者啞然、大學教授連をして「入神の技だね——」を繰り返さした許り、最後に本間振はず終始川副をして名をなさせ、敵は零敗した。中島この間一つのミスなし「あ、油が

乗らなかつた」とはさきもこそ。

長崎高商のゲームを間に置いて最後の大島組。

大學
二 五高
三 大島
平岡
木村
渡邊

平岡組は三高出身、老熟せるその腕。庭に開ける一本老株の八重櫻を月の光に見る様はテニスである。一寸見る目には旭に映する名所の櫻並木が愛せられやうが、風骨ある男には寧ろ前者が讚せらるゝ。要するに味ふて視るテニスである。手叩いて見るテニスでない。之れに向ふは鬼をも挫かんずる大島、龍をも手捕らむずる渡邊。而かも我が兩士に自ら宿る、功妙なテニスの掛引は平岡に劣らない。勝散の数は戦はずして我が有であるが、然し平岡振ふ時は去年五月宇都宮。川副組と交へし如き、一大決戦の起らないとも限らない。當日一の好取組だ。審判官ブレ一の聲は取り分け高かつた。眉ひそむる平岡、唇を微動させて居る渡邊、古往今來かゝる對陣は例多くあるまい。渡邊のスマッシングを恐れてか平岡は強いて熱球を配つた。大島の大きな強い球には然し流石の平岡壓迫されがちである。南蠻鐵に倭魂宿せる

渡邊が腕を擧ぐる時、一箇のゴム球も、閻魔が槌に撃たれし鉛の球でもある様に、大地に重く強く搔ね返へる。目掛けて打つ大島が熱球、米村返へさむどラケット出せば、「何を」と許り搔ね退けて彼方の後ろへ衝いて入る。テニスも遂に蠻勇ども云ふ位ひ元氣を有して居なければ、男兒のテニスは出来るものでない事が知れる。

「五高は實に強い、京坂を薙ぎ倒しては如何」と云ふ大學選手の一人の言葉を、一つの諧謔と知りつゝも微笑を湛へて居る五高の選手、髯は蓬のやうでも、なんと無邪氣ではないか。

大學の厚き待遇に鳴謝しつゝ、暮色と共にかゝり來る細雨に、ラケット大切と、袴の内に隠くして停車場に急ぐ。(多瑕子)

ボート部々報

ボートレース

試験が済むや否各部の撰手は水清き江津の湖畔の合宿所に籠つて、十日の間風雨と戦つて湖神の夢を驚かすほどの大練習をやつた。愈々斯學期が始まつ

と、八百の健兒は撰手の名を讀んで各自勝手に己が部の勝を豫想して見たり又幾分危ぶんで見たりして居た。

四月十日は愈々來た、日曜日といふので五高以外の學生も盛に出かける、天氣がまた曇り日の暑からず寒からずと來てるので釣り込まれて老人や子供も續々江津湖を指した。十時頃には早大分の人が集つた。船から出かけて競漕場の繩張りに添ふて碇泊した見物人も少々ではなかつた。

ドンと競漕開始の號砲が鳴る、拍手が盛に起つた。見ると白一、青二、赤三のコースで勇ましく漕ぎ出して居る。魁の功名は我こそと元氣にまかせて漕ぐ、廻航後は愈々真劍である、舵手の叫聲は一層高く忙しくなつた、遂に青が四分二十九秒でまづ初陣の功名を擧げた。

第二回は四分三十七秒で赤が一着、第三回は四分二十四秒で赤の勝であつた。

第四回は第二撰手のミックスではる。ミックスだから應援も何處といつて方瘤の入れ所はないが、かち各部の人の眼は自ら異様に輝いた。ドンと一發響

くや否や波を蹴つて勇ましく漕ぎ出した。赤一、白二、青三のコースである。廻航迄はよく伯仲の間に進んだが愈々決戦点に近づくや白先づ後れ青は遂に悠々と勝を制した。この間四分十五秒。艇員は大庭、里村、小山、佐伯、佐藤の諸氏であつた。

第五回、今度は第一撰手のミックスである。立派なボートマン揃ひだから見て居て眼がさめるやうだ、赤一、青二、白三のコースであつた。見る人の眼には一層深い注意があつた。流石に優劣がない、廻航後になつて白稍々後れたが赤と青とは殆ど並行して漕いでる。見物人は汗を握つて。撰手の腕は流石に疲れぬ、猛烈に力漕ぐた、僅かの差を以て赤が決勝線に入つた。四分二秒、五。富永、佐川、岡崎、津田、田淵の諸氏であつた。

折角絶好な日和と思はれて居た天氣は妙に暗くなつた、そして西の山が隠れたと見る間にポツポツいたづらな雨が降つて來た。見に來た人々そろ／＼歸るものが出來た。早く晴れて呉れよば宜いかと思つても中々そうはいかぬ、止むと思へばまたポツ／＼やり出す、その間に盛にレースは續けられた。第十

五回まで、普通のレースは終へた。雨はだん／＼烈しくなつて湖上は大分さびれて來た。そのために競手レースを急いで中學、來賓、職員のリースは皆やめてしまつた。職員はレースどころか毛布を頭から被つて辛うじて雨を凌ぎつゝ審判するといふみじめな有様に陥つた。日頃教壇では殿しい顔をしてたいでるのに車夫よろしくといつた体裁で審判の勞を取られたのは誠に氣の毒であつた。

雨を衝いて高工の撰手がレースをやるとその後が愈々第二撰手のレースとなつた。

各部の應援船は盛に湖上を漕ぎまはして旗をくばる、歌を唱ふ、中々の元氣である、雨なんかそつちのけになつてしまつて湖上は再び非常な活氣を帯びて來た。日はだん／＼暮れかゝつたけれど興味は愈々湧いて來た。

撰手は應援に送られて勇ましく出た、

- | | | |
|----------|-------|-------|
| 一部 | 二部 | 三部 |
| 舵手 大庭 孝文 | 山本 徳雄 | 橋本 深一 |
| 整調 石川 豊記 | 里村 静一 | 山田 敬三 |
| 三番 由比 直躬 | 西田 憲之 | 佐藤 正之 |

二番 森谷 定 佐伯 敬雄 佐藤 清熊
 一番 薄田 良二 興梶菊太郎 小山 逸見
 コースは白一、赤二、青三であつた。應援旗は小さな小供にまで配られて居て白よ青よ赤よとその景氣は非常なものであつた、青は廻航するとすぐ大分後れた、白は次第に抜きあげた、もう氣が氣でない、舵手は一生命に叫ぶ、青の應援旗は引きぢぎらる程振られた、しかし青は赤と雁行し得た迄で遂に白は二艇身近く抜いて決勝線に入つた。四分四秒を要した。二部生の歡喜は非常であつた。

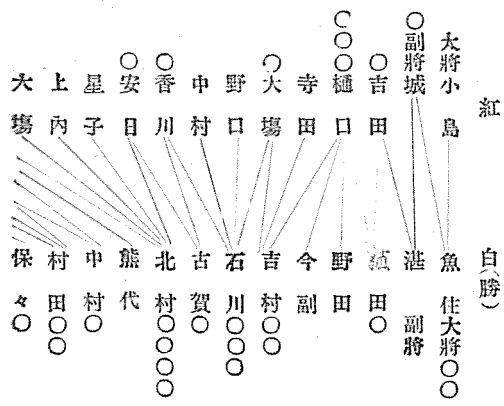
次で第一撰手の番となつた。もう大分暗くもなつたし雨は益々烈しい。應援の聲はこれにも増して盛んである。去年は一部が勝つた、この光榮を他の部に取られてはならないと一部は懸命に練習した、二部、三部は今年こそ優勝旗を手をせねば濟まぬとまたこれ臥薪嘗膽の苦を堪へた。撰手は聲援に耳も聳せんばかりの中を勇ましく出陣した。

- | | | |
|----------|-------|------|
| 一部 | 二部 | 三部 |
| 舵手 平澤 幹 | 坂田 昌亮 | 富永 覺 |
| 整調 佐川 宣賢 | 野津 賀調 | 金丸 愿 |

劍道部々報

四月二十三、四日、熊本支部に於て第十四回武徳祭演武大會舉行せられ、我部よりは二十余名の出演者あり。成績は例に依り良好なりき。

五月十七日午後、濟美館に於て春期紅白勝負を舉行す。結果左の如し（欠席者のため紅白軍少しく數に於て差あり）



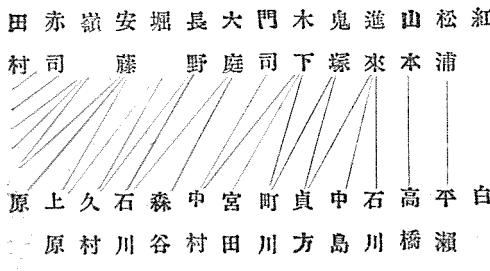
三番 谷 守文 岡崎 泰助 門田 綱紀
 二番 津田榮一郎 矢野純太郎 渡邊 淡水
 一番 福岡 宗鷹 田淵 壽郎 安岡 惠經

揃つたと見る間にドンと一發、三艘は我れ劣らじと漕ぎ出した、コースは白一、青二、赤三であつた。鬼をもひじく鐵腕に金剛力を込めて漕ぎ立つたから見る間に廻航する様になつた。天か命か一部が少し手間取る間に二部はずつと抜いた、三部は急漕大に努めたけれど次第に後れかゝつた。青々、赤々、白々と應援の聲は狂せんばかりであつた猛然として青はヘビーをかけて白を抜かんと計つたが機既に去つてまた如何ともするに由なく、遂に一艇身の差を以て白は凱歌を奏した。この間僅に三分五十九秒であつた。一部と三部はそば降る雨の中に立つて暗涙を飲んだ。二部は此上なき大捷に狂せんばかりに喜んだ。

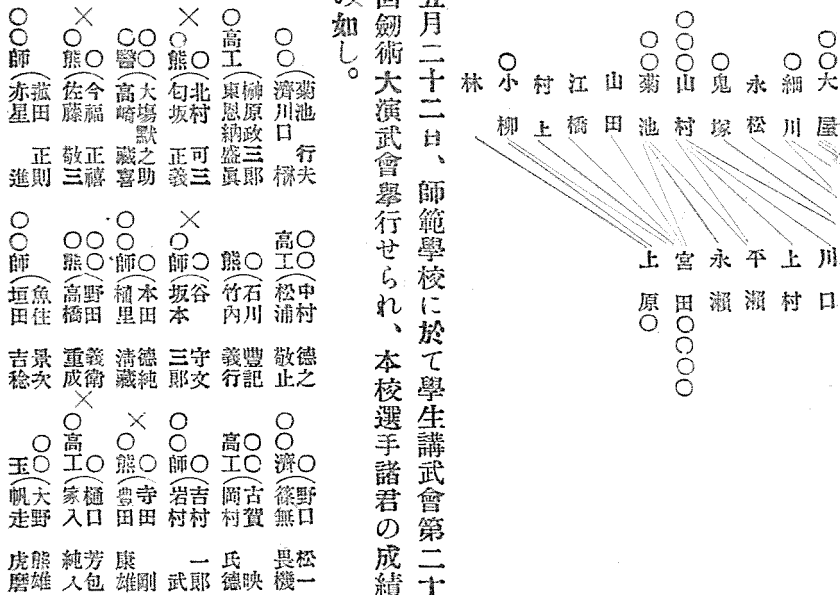
かくて競漕は終つた。雨は益々烈しう降つて暗の幕は徐に潮上を覆ひかけた。雨中に響く凱歌は二部生の歡喜の聲であらう。

柔道部報

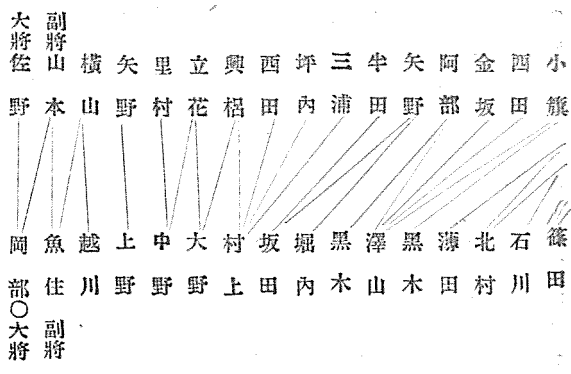
四月三十日武夫原の夏若うして龍南の健兒脾肉を撫して三嘆す、龍山の新緑燃わて健兒潑瀾の韻を帶ぶ即ち我部は茲に三年級部員諸兄の豫餞を兼ねて紅白勝負を神江師範審判の下に催す、午後二時前卅分一同校側にて紀念の撮影をなす、而して道場集るものこれ一騎當千の若武者、其勇々しき虎搏の狀をいで禿筆を呵して左に



五月二十二日、師範學校に於て學生講武會第二十一回劍術大演武會舉行せられ、本校選手諸君の成績左の如し。



○師(赤星)	○熊(佐藤)	○醫(高崎)	○熊(北村)	○高工(東恩)	○濟川口	○藥池
○師(垣田)	○熊(高橋)	○師(植里)	○師(坂本)	○熊(竹内)	○高工(松浦)	○中村
○師(帆走)	○高工(榎口)	○熊(寺田)	○師(岩村)	○高工(岡村)	○濟(篠無)	○野口
○師(虎磨)	○熊(純入)	○熊(康雄)	○師(武)	○高工(氏映)	○野口(松一)	○松一



小旗——黒木 前者は斯道の業利き後者は老練互にしのぎをけつりしがすきやありけん
 前者のくりだす跳腰見事に極る、
 小旗——澤山 後者業に於て天晴なり体落しを以て機先を制して勝、
 西羸——澤山 しばしみ合ひしが体を開きて突き入

る後者の大外刈にて前者は脆くも敗れぬ

金坂——澤山 互に勝を争しも後者は二人を倒して悠々逼らず跳腰にて後者の勝、

阿部——澤山 前者は体こそ小なれ天晴れの業利きを以て囁せらる連發せる脊負は防ぎ兼ねて後者は勝を譲りぬ、

阿部——黒木 互角と見わけん暫く勝敗決せず分となる、

矢野——堀内 互に新進氣鋭の士機を見て繰り出す

矢野——坂田 前者の大外刈に後者は道場に倒れぬ後者は斯道の老練家、悠々逼らず左脊負にて前者の負、

半田——坂田 前者は身体倭小にして横に長き方あり斯道の怪物、坂田も此れには如何ともする事能はず押へ込みに業を得しも分となる

三浦——村上 前者は業利き、後者は全校切つての剛の者、何條支へん後者の跳ね出す

跳腰前者脆くも空に舞ひぬ、

坪内——村上

前者は軀幹偉大押へ込にて名あり、よく防ぎよく、戦しも後者の打股にて体を横へぬ、

西田——村上

前者は前回の恥をそぐがんと少し急ぎしものから返しを以て不覺を取る

興梠——村上

好勝負なり体を開き隙に飛び込む早業目にも止らず後者は前の數合の仕合に疲れて後れ絞めにて首は落ちぬ

興梠——大野

後者は跳腰大外刈に出で前者はよく防ぎしも釣込腰にて遂に負けぬ

立花——大野

立花長軀を屈して脊負投げに出づ未だ功なし己にして再度の脊負極つて疊に鞞然の聲をなして前者の勝

立花——中野

後者は二十貫の体軀を軽く運んで大道曰の轉げ來るが如く辨々たるごん腹を叩いて向ふ數合の操み合ひの後袈沙固めて見事に勝つ

里村——中野

前者は本場で鍊ひし強者悠々通らず後者の連發し來る押込みを辛く防ぎつゝ大外刈に出でしも極らず暫くの

矢野——上野

後引き分とある

共に軀幹に於て遺憾なし押しつ引きつ互に打合ひしに後者機を見て出足拂にて業を得ぬ暫くにして勝負極らず引分けとなる

横山——越川

共に三年間練習を積みし剛の者引きつ押へつする間に後者の移腰に見事極りぬ、

横山——魚住

後者は劍道に其人ありと知らるゝ斯道の達人髮武者なり何ぞ柔術の後れを取らんやと勇み切つて操りだす脊負に見事の勝を制しぬ

山本——魚住

前者横山の無念晴し呉れんと立ち來る虛に乗じて後者の巴投げに前者は空を舞ひて横はる

佐野——魚住

前者は元來の業師後者の脊負利かず体の崩れし虚に乗じて巴に前者の勝利、

佐野——岡部

後者は名だたる熱心家、前者の返しに誤る業を得らる切齒して立ち向

ふ再度の跳腰極つて大將の丹桂冠を
得ぬ時に恰も五時

茶菓山積敵も味方も打とけて未だ血醒き鎧の袖をく
つろげて笑ひ興じたるさすがに勇士の心懐神々しく
ぞ覺ゆれ、此日村上、澤山二君は成績優等を以て優
勝メダルを興へらる、

因記 此日校長は上京中、白壁部長渡邊中尉モール先生の特に
駕を柱げ玉へるは部員一同深く感謝する處なり尙卒業生生の多數
の欠席されしは深く遺憾とする所なり元氣はありや否や

熊本學生講武會第二十回柔道演武大會出演者

(明治四十三年五月十五日於熊本中學校)

- 熊(安)田 義 敏
- 五(山)領 藤 正 喜
- 高(工)坂 田 英 一
- 高(工)久 村 秀 治
- 高(工)紀 井 邦 資
- 高(工)上 野 公 一
- 高(工)柴 田 省 吾
- 高(工)立 花 貫 一
- 高(工)田 崎 一 生
- 高(工)森 内 正 一
- 高(工)山 領 清
- 高(工)他 勇 定
- 高(工)上 野 正 一
- 高(工)森 内 正 一

終つて切取勝負に村上君は一等賞を興梶君は三等賞
を得らる

明治四十三年龍南會費決算書

收入ノ部

區 分

基本金繰越額

通常會員費

名譽會員寄付

新入會員入會金基本金繰入

預金利息

紀念運動會費殘餘繰入

端艇競漕會寄付金

兔網紛失辨償金

前年度繰越金

合 計

支出ノ部

基本金支出

演說部

雜誌部

擊劍部

柔道部

金額

一、七四九三〇〇	二〇〇〇〇〇	四一四〇五〇	三〇六〇〇〇	一一九一〇	一一五九二	一一〇〇〇	二〇〇〇	二四三六〇五	二、九四九四五七	一八七一五〇	四九九六〇	四四六二三八	一七七五〇〇	一三七一六五
----------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	------	--------	----------	--------	-------	--------	--------	--------

弓術部	九〇三〇〇
野球部	一八六五八五
庭球部	一九三五三〇
端艇部	三五九八四〇
水泳部	九〇四〇〇
無所屬	四八三一八〇
合計	二、四〇一八四八
差引殘額	五四七六〇九
基本金現在額	三一八八五〇
翌年度へ繰裁額	二二八七五九

内 譯

習學寮役員改選

來學期幹事及炊事委員長

幹事	一部	平澤 幹君
	二部	矢野純太郎君
	三部	安岡 惠經君
炊事委員長	一部	志村 哲君
	二部	山本 徳雄君
	三部	橋本 深一君

「こゝで彼は一のサレンヤに達した。彼は自分と三十年代との關係を、直線的に自然の命する通り發展させるか、又全然其反對に出で、何も知らぬ昔に返へるか、何方かにしなければ生活の意義を失つたものご等しいと考へた。其他あらゆる中途半端の方法は偽りに始つて偽りに終るより外に道はない。悉く社會的安全であつて、悉く自己に對して無能力である……………」